

幼児の被害場面における悲しみ感情への対処

—感情経験主体が自己の場合と他者の場合—

教育心理学コース 浜 名 真 以

Young Children's Coping with Sadness

— A Comparison between the Strategies They Generate for Themselves and for Others —

Mai HAMANA

The present study investigates young children's understanding about coping with sadness in a hypothetical situation where the protagonist of a story is either the child him/herself or a stranger. Children ($N=52$, 4-6 years old) heard stories in which the protagonist's product is broken by a friend and he/she feels very sad. There were two conditions: self-target condition and other-target condition. In each condition, children generated strategies for the protagonist to cope with sadness. The results showed that young children generated more strategies focused on repairing products in the self-target condition than in the other-target condition. Finally, the importance of the finding that young children come up with more strategies focused on repairing products for themselves than for others was discussed.

目 次

- 1 問題と目的
 - A 幼児の感情推論とその特徴
 - B 幼児の感情推論に影響を与えるもの：ネガティブ感情への対処に関する認識
 - C ネガティブ感情への対処方略の種類
 - D 幼児におけるネガティブ感情への対処方略の産出
 - E 本研究の目的
- 2 方法
 - A 参加者
 - B 倫理審査
 - C 材料
 - D 手続き
- 3 結果
 - A 回答内容の分類
 - B 条件、カテゴリーごとの比較
- 4 考察
 - A 結果の概略
 - B 先行研究に照らした考察
 - C 方略の種類による違い
 - D 展望

引用文献
付記

1 問題と目的

A 幼児の感情推論とその特徴

幼児期になると、子どもは幼稚園や保育園に通うようになり、同年齢の集団の中で人間関係を広げていく。そして、友達とかかわる中でポジティブ感情をもネガティブ感情をも経験する。その中で子どもは、どのような状況でどのような感情を経験するかを推論する能力を飛躍的に発達させる^{1) 2) 3) 4)}。

幼児を対象とする感情推論に関する研究では、紙芝居や人形劇などで特定の状況を提示し、主人公が経験する感情の種類や強度を推論させることが多い。その主人公には、回答する子ども自身が設定される場合（以下、自己条件）と、架空のキャラクターが設定される場合（以下、他者条件）がある。両者を比較した研究からは、他者条件に比べ自己条件において、幼児は強いネガティブ感情を推論しにくいことが示されている^{5) 6)}。

B 幼児の感情推論に影響を与えるもの：ネガティブ感情への対処に関する認識

自己条件と他者条件の両方での感情推論を扱った2つの先行研究がある。それらの先行研究からは、他者条件に比べ自己条件において強いネガティブ感情を推論しにくいという幼児の感情推論の特徴には、ネガ

ティブ感情への対処に関する認識が関連するということが示唆されている^{7) 8)}。以下 2 つの先行研究を概観し、さらに検討が必要な点について述べる。

1 つ目の研究として、浜名 (2018)⁹⁾ は、主人公が加害者から作品を破壊される状況を用いて、自己条件と他者条件での主人公の感情や対処能力について回答させた。その結果、幼児は、他者条件に比べ自己条件では、主人公が経験するネガティブ感情の強度レベルを低く評価し、同時に、主人公の対処能力を高く評価することがわかった。この結果から、幼児は自己条件では主人公の対処能力を高く評価するので、主人公が強いネガティブ感情を経験せずに済むと考える可能性が示された。

浜名 (2018)¹⁰⁾ では、主人公の対処能力として破壊された作品を修復するという対処方略 (以下、オブジェクト修復方略) に焦点を当てていた。そのため、参加者は調査者からオブジェクト修復方略を提示され、主人公がその方略を遂行する能力の程度を評価した。しかし、作品を破壊されるという状況では、オブジェクト修復方略以外にも様々な対処方略をとることが可能である。例えば、気分転換をする、加害者と話し合うなどの方略もある。それらの方略全般について条件間で認識の違いがあるのか、特定の方略のみについて条件間で認識の違いがあるのかについては検討されていない。

2 つ目の研究として、Karniol & Koren (1987)¹¹⁾ は、様々な状況を用いて、自己条件と他者条件において主人公の感情を推論させた。その結果、幼児は他者条件に比べて自己条件では、主人公の感情としてネガティブ感情ではなくニュートラル感情やポジティブ感情を推論しやすかった。さらに、その際に調査者から理由を尋ねられぬうちに自発的に対処に言及しやすかったことがわかった。例えば、幼児は、迷子でひとりぼっちになったというネガティブな状況を提示すると、「友達と遊ぶ」などの対処に言及するということである。しかし、この研究では産出された対処方略の分類は行っていない。そのため、他者条件に比べ自己条件で特にどのような方略が言及されやすかったのかは不明である。

これら 2 つの研究から、自己条件と他者条件で幼児のネガティブ感情への対処に関する認識が異なることが明らかとなった。しかしどちらの研究からも、方略全般について条件間で認識が異なるのか、特定の方略のみについて条件間で認識が異なるのかはわかっていない。他者条件に比べ自己条件において強いネガティ

ブ感情を推論しにくいという幼児の感情推論の特徴を支える幼児の認識について詳細に知るには、条件間で認識が異なる対処方略の種類を特定する必要がある。

そこで、本研究では、幼児に自己条件と他者条件で主人公のとるべきネガティブ感情への対処方略を産出させ、対処方略をカテゴリーに分類した上で条件間で産出しやすさに違いがあるかを検討する。それにより、幼児が他者条件に比べ自己条件でどのような対処方略を想定しやすいかを明らかにできる。このことは、他者に比べ自己が強いネガティブ感情を経験しにくいという幼児の認識の背後にあるメカニズムの解明につながる。なお、本研究では、調査者が予め対処方略を提示するのではなく、対処に関する質問を通して参加者に対処方略を産出させることで、他者条件に比べ自己条件において幼児が対処方略を思いつきやすいかどうかを調べる。実際の生活場面では、誰かからある方略が提案されてその方略を遂行するとは限らず、自らネガティブな状況でできることを思いつく必要があるためである。

C ネガティブ感情への対処方略の種類

前段落では、自己条件と他者条件の間で、どのような対処方略の産出しやすさに違いがあるかを検討する必要があると述べた。では、ネガティブ感情への対処方略には具体的にはどのようなものがあるだろうか。ネガティブ感情への対処は、問題焦点型対処方略と感情焦点型対処方略の 2 つに分けられる¹²⁾。問題焦点型対処方略とは、ネガティブ感情を引き起こした状況を改善しようとするものである。感情焦点型対処方略とは、ネガティブ感情そのものを改善しようとするものである。

問題焦点型対処方略と感情焦点型対処方略それぞれに、有効な方略やあまり有効でない方略が存在する。子どもを対象とした研究では主に、有効な問題焦点型対処方略として修復方略が取り上げられる。修復方略には、壊れたオブジェクトを作り直すことや、予定を立て直すことが含まれる。あまり有効でない問題焦点型対処方略として暴力を振るう攻撃方略や、母親に叫ぶ方略が取り上げられる。有効な感情焦点型対処方略として気晴らし方略が取り上げられる。あまり有効でない感情焦点型対処方略として反芻方略や、ネガティブ感情を過度に表出する感情爆発方略が取り上げられる^{13) 14)}。

D 幼児におけるネガティブ感情への対処方略の産出

幼児は、悲しみや怒りなどのネガティブ感情への有効な対処方略を自分で思いつき産出することが可能である。Cole et al (2009)¹⁵⁾、Davis, Levine, Lench, & Quas (2010)¹⁶⁾は、幼児を対象に架空のキャラクターがネガティブ感情を経験する場面を提示し、そのネガティブ感情にどう対処すれば良いかを尋ねた。その結果、幼児は有効な問題焦点型対処方略や感情焦点型対処方略を産出できることが示された。Davis et al (2010)¹⁷⁾はこの課題に加え、幼児自身がネガティブ感情を経験した出来事を想起させ、実際にその感情にどう対処したか尋ねることも行っている。その場合にも、幼児は有効な問題焦点型対処方略や感情焦点型対処方略を回答することが示されている。

しかし、これらのネガティブ感情への対処方略の産出を扱った先行研究では、自己条件と他者条件でのネガティブ感情への対処に関する認識の違いを検討していない。Davis et al (2010)¹⁸⁾は、自己と他者の両方によるネガティブ感情への対処を扱ってはいるが、自己によるネガティブ感情への対処に関しては参加者自身が実際に経験した出来事について尋ね、他者によるネガティブ感情への対処に関しては調査者が設定した状況を提示して尋ねている。そのため、自己によるネガティブ感情への対処と他者によるネガティブ感情への対処を直接比較しているわけではなく、両者の間に違いがあるかは不明である。

E 本研究の目的

そこで本研究では、幼児を対象に自己条件と他者条件でネガティブな状況を提示し、主人公がとるべき対処方略を産出させる。そして、条件によって対処方略の産出しやすさが異なるかを方略の種類ごとに検討する。この検討は幼児期の感情推論の背景メカニズムの解明につながる。他者条件に比べ自己条件において何らかの対処方略を産出しやすいのであれば、それが他者条件に比べ自己条件において強いネガティブ感情を推論しにくいという感情推論の特徴に寄与している可能性がある。なお、参加者自身が実際に経験したネガティブな状況を扱わなかった理由は、同じ状況で経験する同じ感情に対してとるべき対処方略を自己条件と他者条件で比較するためである。

検討にあたり、本研究では特に悲しみ感情に注目する。悲しみは、幼児を対象としたネガティブ感情への対処方略に関する研究で扱われることが多く^{19) 20)}、かつ、幼児が他者に比べ自己の方がネガティブ感情にう

まく対処できると考えていることを示唆する2つの先行研究でも扱われている感情である^{21) 22)}。

2 方法

A 参加者

東京都内の保育園に通う幼児52名（平均：5歳3か月、レンジ：4歳3か月～6歳2か月、うち男児26名）が研究に参加した。通常の保育時間内にクラス担任の保育士から調査に関する説明を受け、参加に同意した者のみが研究に参加した。

B 倫理審査

本研究は東京大学倫理審査専門委員会（審査番号18-55）にて承認を受けた。対象となった保育園には、調査目的、実施内容、個人情報保護などの説明を行い研究協力の同意を得た。

C 材料

キャラクター選択図版、被害状況図版、強い悲しみ感情図版、悲しみ感情スケールを使用した。

キャラクター選択図版は、一方のキャラクターを参加者自身、もう一方のキャラクターを他者として設定するために2人のキャラクターが描かれた図版である。浜名(2018)で用いられたものと同じものである。2人のキャラクターの両方が男児のものと同様が女児のもの2種類を用意し、参加者の性別に合わせて使用した。

被害状況図版は、被害者である主人公の作品が友達に壊される場面の図版である。被害状況図版も、浜名(2018)²³⁾で用いられたものと同じものである。浜名(2018)²⁴⁾において、幼児が、他者条件に比べ自己条件で主人公の対処能力を高く評価すること明らかとなっているため、本研究でも同じ図版を用いた。積み木の城を壊される場面、砂山を壊される場面、粘土の鳥を壊される場面の3種類を使用した。被害状況図版は、主人公や他のキャラクターの全員が男児のものと同様が女児のものを用意し、参加者の性別に合わせて使用した。用意した被害状況図版は全部で3（場面：積み木、砂山、粘土）×2（被害者：自己、他者）×2（性別：男、女）の12種類であった。

強い悲しみ感情図版は、キャラクターの顔がアップとなり、強い悲しみ表情を示している図版である。被害を受け主人公が強い悲しみを経験したことを示すための図版で、本研究において新たに作成した。強い悲

しみ感情図版は、2（被害者：自己，他者）×2（性別：男，女）の4人のキャラクターの分として4種類用意した。強い悲しみ感情図版の例をFigure 1に示す。



Figure 1 強い悲しみ感情図版の例

悲しみ感情スケールは、悲しみ感情の強度レベルを下げたりなくしたりすることを説明するための図版である。Dennis & Kelemen (2009), Gautam, Bulley, von Hippel, & Suddendorf (2017)^{25) 26)}を参考に、本研究において新たに作成した。悲しみ感情スケールは、7つの表情図から成っていた。悲しみ感情スケールをFigure 2に示す。

D 手続き

保育園内の静かなスペースで1対1の個別調査を実施した。調査者は、事前に参加者の好きなことについて話す、保育に参加するなどを通してラポール形成に努めた。なお、調査中に参加者が不快や著しい緊張を示した場合には、即座に調査を中止した。

初めに、参加者にキャラクター選択図版を提示し、自身がどちらのキャラクターに似ているかを回答させた。参加者の回答から、一方のキャラクターを参加者自身、もう一方のキャラクターを参加者と同姓で同年齢のとみちゃん（参加者が男児の場合は、とみくん）と決め、参加者の了解を得た。

自己条件では、「○○ちゃん（参加者の名前）のお話をするね」と言って、被害状況図版を見せながら参加者を主人公とした場面について説明した（例「○○ちゃんは積み木でお城を作りました。そのお城は今まで一番上手にできました。でも、そこにお友達が来

て、お城はガラガラ崩れてしまいました。』）。

場面の説明の後、強い悲しみ感情図版を提示し、「○○ちゃんはすごく悲しい気持ちになりました。」と説明した。その後、悲しみ感情スケールを見せながら、対処方略質問（「○○ちゃんはすごく悲しい気持ちを小さくしたり、なくしたりするために、どうしたらいいかな？」）を行った。1回の対処方略質問につき1種類の対処方略を回答させた。

続いて、実現可能性質問、実現後の感情質問を行った。実現可能性質問では、参加者が対処方略質問で回答した方略の実現可能性を4段階で尋ねた。実現後の感情質問では、悲しみ感情スケールを提示し、対処方略実現後の感情を尋ねた。ただし、これらの質問については、対処方略質問への回答内容によっては実施が困難であった。例えば、対処方略質問に対する回答が「わからない」であった場合、実現可能性や実現後の感情についての質問が意味をなさない。また、対処方略質問に対する回答が「なにもしない」であった場合、実現可能性質問が機能しなかった。そのため、本論文では、実現可能性質問、実現後感情質問への回答は分析しない。

3つの場面の提示順序についてはランダムな順序を3パターン作成し、そのいずれかを参加者にランダムに割り当てた。場面の提示順序は自己条件と他者条件で同じであった。他者条件では、「とみちゃんのお話をするね」と言ってとみちゃんを主人公とした場面についての説明と質問を行った。半数の参加者は自己条件が先、もう半数の参加者は他者条件が先になるようカウンターバランスを取った。

3 結果

A 回答内容の分類

まず、Lazarus & Folkman (1984 本明他訳 1991)²⁷⁾の分類に従い、対処方略質問に対して産出された対処方略を問題焦点型対処方略と感情焦点型対処方略の2つのカテゴリーに分類した。問題焦点型方略は、ネガティブ感情の原因となった問題を解決しようとするも

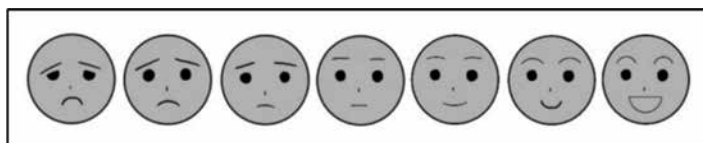


Figure 2 悲しみ感情スケール

のである。感情焦点型方略は、ネガティブ感情そのものを改善しようとするものである。

問題焦点型対処方略に属する回答については、さらに、壊れた作品を修復しようとする方略（オブジェクト修復方略）と、加害者との関係を修復しようとする方略（関係修復方略）に下位分類した。オブジェクト修復方略に属する回答は「また作る」、「直す」などであった。関係修復方略に属する回答は「やめてと言う」、「ごめんねって言う」と言うなどであった。感情焦点型対処方略に属する回答は「別の遊びをする」、「夕焼けを見る」などであった。

また、対処方略質問では、主人公が実施する対処方略を尋ねたのにもかかわらず、「壊した人が作り直す」などの加害者による行動や、「△△ちゃんが励ましてくれる」などの提示した場面には登場しない第三者による行動も産出された。そのため、主人公以外の人物による行動に関する回答が属するカテゴリーとしてポジティブな見通しというカテゴリーを設けた。

有効でないと考えられる加害者への攻撃方略（「ぶん殴る」）を産出した参加者は1名、問題焦点型と感情焦点型のどちらに当てはまるかが判断できない方略（「先生に言う」）を産出した参加者は1名、方略やポジティブな見通しではない回答（「何もしない」、「諦める」）を産出した参加者は2名であったため、それらの回答は以降のカテゴリーに関する分析から除外した。

B 条件、カテゴリーごとの比較

各カテゴリーの回答が産出された場面の数を条件ごとに算出し、各カテゴリーの条件ごとの産出得点とした。得点範囲は0点から3点であった。各カテゴリーの条件ごとの産出得点の平均値と標準偏差をTable 1に示す。

Table 1 各カテゴリーの条件ごとの産出得点の平均値と標準偏差

	自己条件		他者条件	
	平均値	SD	平均値	SD
問題焦点型対処方略				
オブジェクト修復方略	1.15	1.42	0.88	1.26
関係修復方略	0.54	1.04	0.58	1.05
感情焦点型対処方略	0.29	0.78	0.29	0.7
ポジティブな見通し	0.63	1.16	0.67	1.13

主要な分析に先立ち、条件ごとの各カテゴリーの回答の産出得点に対して、年齢（年中、年長）、性別（男、女）、条件の提示順序（自己条件先行、他者条件先行）の影響がないことを確認する必要がある。そのため、条件ごとの各カテゴリーの回答の産出得点を従属変数、年齢、性別、条件の提示順序のそれぞれを独立変数とする対応のないt検定を行った。その結果、年齢、性別、条件の提示順序による産出得点の差はみられなかった。そのため以降の分析では、年齢、性別、条件の提示順序については要因に含めなかった。

主要な分析として、各カテゴリーの回答の産出得点が自己条件と他者条件で異なるかを検討するため、各カテゴリーの回答の産出得点を従属変数、条件（自己、他者）を独立変数とする対応のあるt検定を行った。その結果、オブジェクト修復方略については条件による差が認められ、他者条件に比べ自己条件において産出得点が高かった ($t(51)=2.61, p=.01, d=0.20$)。関係修復方略、感情焦点型対処方略、ポジティブな見通しについては条件による差は認められなかった ($t(51)=0.42, p=.68, d=0.04$; $t(51)=0.00, p=1.00, d=0.00$; $t(51)=0.34, p=.74, d=0.04$)。

4 考察

A 結果の概略

本研究では、幼児を対象に自己や他者が悲しみを経験した際にとるべき対処方略を産出させた。そして、自己が悲しみを経験する場合（自己条件）と他者が悲しみを経験する場合（他者条件）で対処方略の産出しやすさを比較した。分析の結果、他者条件に比べ自己条件ではオブジェクト修復方略を産出しやすいことが示された。関係修復方略、感情焦点型対処方略、ポジティブな見通しについては条件間で違いがみられなかった。

B 先行研究に照らした考察

先行研究でも、幼児が他者条件に比べ自己条件で対処能力を高く見積もることや²⁸⁾、他者条件での感情推論時に比べ自己条件での感情推論時に対処に言及しやすいことは示されていた²⁹⁾。しかし、先行研究では、対処方略全般について条件間で認識が異なるのか、特定の方略のみについて条件間で認識が異なるのかは検討されていなかった。そこで本研究では、産出された対処方略の回答をカテゴリーに分類した上で分析を行った。そうすることで、幼児が他者条件に比べ自己

条件において特にオブジェクト修復方略による対処を想定しやすいことを明らかにできた。

オブジェクト修復方略で条件差がみられたことは、浜名 (2018)³⁰⁾ に一貫する結果である。浜名 (2018)³¹⁾ は、調査者からオブジェクト修復方略を提示された場合に、幼児が他者条件に比べ自己条件においてその方略を遂行する能力を高く見積もることを示した。さらに、そのような対処に関する認識が他者条件に比べ自己条件において強いネガティブ感情を推論しにくいという感情推論の特徴に寄与する可能性を示唆していた。本研究では、浜名 (2018)³²⁾ とは異なり、調査者からオブジェクト修復方略を提示されなくても他者条件に比べ自己条件においてオブジェクト修復方略を想定しやすいことを示すことができた。実際の場面では子どもが自らネガティブな状況で何ができるかを思いつくる必要がある。このことを考慮すると、本研究においてオブジェクト修復方略の産出しやすさの条件差を見出したことは、ネガティブ感情への対処に関する認識が感情推論の特徴に寄与する可能性をより強めたと言える。

C 方略の種類による違い

では、なぜオブジェクト修復方略でのみ条件差がみられたのだろうか。オブジェクト修復方略は、加害者や周りの人に関係なく主人公一人の力で状況を改善する方略である。一方、関係修復方略、感情焦点型対処方略、ポジティブな見通しは、主人公一人の力で状況を改善する方略ではない。関係修復方略は、加害者とのやりとりによって加害者との関係を修復するものである。主人公自身に自己主張の力があっても、例えば加害者が聞く耳を持たなかったり逃げてしまったりすれば状況は改善されない。感情焦点型対処方略は、状況自体を改善しようとするものではなく感情を改善しようとするものである。ポジティブな見通しは、主人公ではなく加害者や第三者に状況や主人公の感情の改善を委ねるものである。

このように各方略の特徴を比べると、オブジェクト修復方略のみが主人公一人の力で状況を改善する方略であるとわかる。このことから、幼児は、他者に比べて自己は自身の力で状況を改善できると考えていることが示唆された。

D 展望

本研究から、幼児は、他者条件に比べ自己条件において主人公が自身の力で状況を改善できると考えてい

ることが示唆された。そしてこの特徴が、他者条件に比べ自己条件において強いネガティブ感情を推論しにくいという幼児の感情推論の特徴に影響をしている可能性について議論してきた。しかし、ネガティブ感情への対処に関する認識によるネガティブ感情推論の特徴の影響を調べるには、本来は同じ参加者のネガティブ感情への対処に関する認識とネガティブ感情推論の特徴を調査し両者の関連を示す必要がある。他者条件に比べ自己条件でネガティブ感情への対処方略を産出しやすい子どもほど、他者条件に比べ自己条件で強いネガティブ感情を推論しにくいという関連を示すことができれば、ネガティブ感情への対処に関する認識が幼児のネガティブ感情推論に寄与しているという結論をより確かなものにできる。今後は研究を重ね、幼児の感情推論の背景にあるメカニズムをより詳細に明らかにしていくことが望まれる。

引用文献

- 1) Denham, S.A., & Couchoud, E.A. 1990. "Young preschoolers' understanding of emotions." *Child Study Journal*, 20: 171-192.
- 2) Levine, L. 1995. "Young children's understanding of the causes of anger and stress." *Child Development*, 66: 697-709.
- 3) Widen, S.C. & Russell, J.A. 2010. "Children's scripts for social emotions: Causes and consequences are more central than are facial expressions." *British Journal of Developmental Psychology*, 28, 565-581.
- 4) Widen, S.C. & Russell, J.A. 2010. "Differentiation in preschoolers' categories for emotion." *Emotion*, 10: 651-661.
- 5) 浜名真以 2018. 「幼児による被害場面における状況評価と感情強度の評価—被害者が自己である場合と他者である場合の比較—」『発達心理学研究』, 第29巻, 第3号, pp. 125-132.
- 6) Karniol, R., & Koren, L. 1987. "How would you feel? Children's inferences regarding their own and others' affective reactions." *Cognitive Development*, 2: 271-278.
- 7) 浜名, 前掲論文 (2018)
- 8) Karniol, R., & Koren, L., 前掲論文 (1987)
- 9) 浜名, 前掲論文 (2018)
- 10) 同上
- 11) Karniol, R., & Koren, L., 前掲論文 (1987)
- 12) Lazarus, R.S., & Folkman, S. *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing, 1984 (ラザルス, R. S.・フォルクマン, S., 本明寛・春木豊・織田正美監訳『ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—』実務教育出版, 1991.)
- 13) Cole, P.M., Dennis, T.A., Smith-Simon, K.E., & Cohen, L.H. 2009. "Preschoolers' emotion regulation strategy understanding: Relations with emotion socialization and child self-regulation." *Social Development* 18: 324-352.
- 14) Dennis, T.A., & Kelemen, D.A. 2009. "Preschool children's views

- on emotion regulation: Functional associations and implications for social-emotional adjustment." *International Journal of Behavioral Development*, 33: 243-252.
- 15) Cole et al., 前掲論文 (2009)
- 16) Davis, E.L., Levine, L.J., Lench, H.C., & Quas, J.A. 2010. "Metacognitive emotion regulation strategies: Children's awareness that changing thoughts and goals can alleviate negative emotions." *Emotion*, 10: 498-510.
- 17) 同上
- 18) 同上
- 19) Cole et al., 前掲論文 (2009)
- 20) Waters, S.F., & Thompson, R.A. 2014. "Children's perceptions of the effectiveness of strategies for regulating anger and sadness." *International Journal of Behavioral Development*, 38: 174-181.
- 21) 浜名, 前掲論文 (2018)
- 22) Karniol, R., & Koren, L., 前掲論文 (1987)
- 23) 浜名, 前掲論文 (2018)
- 24) 浜名, 前掲論文 (2018)
- 25) Dennis et al., 前掲論文 (2009)
- 26) Gautam, S., Bulley, A., von Hippel, W., & Suddendorf, T. 2017. "Affective forecasting bias in preschool children." *Journal of Experimental Child Psychology*, 159: 175-184.
- 27) Lazarus, R.S., & Folkman, S., 前掲書 (1984)
- 28) 浜名, 前掲論文 (2018)
- 29) Karniol, R., & Koren, L., 前掲論文 (1987)
- 30) 浜名, 前掲論文 (2018)
- 31) 同上
- 32) 同上

付記

研究にあたりご指導いただきました針生悦子教授(東京大学)に深く感謝申し上げます。また、研究にご協力いただいた保育園の先生方、園児の皆様にご場を借りて心よりお礼申し上げます。材料作成にあたってご協力いただきました富岡由佳子さんに感謝いたします。なお、本研究は平成29年度日本学術振興会科学研究費補助金特別研究員奨励費の助成を受けて行いました。

(指導教員 針生悦子教授)